

キャンパスライフサポートに求められるもの —臨床心理士の立場から— (第1報)

岡田 淳子¹⁾・山倉 辰裕¹⁾・薄木 佳苗¹⁾・村松 公美子²⁾・熊谷 綾子³⁾

1) 新潟青陵大学キャンパスライフサポート室

2) 新潟青陵大学大学院臨床心理学研究科

3) 新潟青陵大学健康管理センター

キーワード：キャンパスライフサポート、学生相談、キャリア発達支援

Roles Required for a Better “Campus Life Support” — from a perspective of Clinical Psychologist — The first report

Junko OKADA,¹⁾ Tatsuhiko YAMAKURA,¹⁾ Kanae USUKI,¹⁾
Kumiko MURAMATSU,²⁾ Ayako KUMAGAI³⁾

1) Campus Life Support Room of Niigata Seiryō University

2) Graduate school of Niigata Seiryō University, Department of Clinical Psychology

3) Health center of Niigata Seiryō University

Key words : Campus Life Support, Student Counseling, Career Support

I. はじめに

思春期から青年期にさしかかる大学生という時期は、自我の確立に向けて模索する時期と言われる。近年の高等教育をめぐる状況もまた流動的となっており、特に大学全入時代を迎え、大学は独自の役割と機能を改めて考える時代となった。加えて、日本学生支援機構(2007)も指摘するように、様々な支援を必要とする学生が増え、学生相談支援体制の充実が急務となっている。

近年、筆者らの勤務する大学では、健康管理室利用者の中に相談目的や心因性疲労のため来室する学生が、年々増加傾向にあった。学生相談利用者数は横ばい状態であるが、学内教員が相談員を兼ねていることにより、相談があっても学生相談を利用できない学生が、潜在的に存在している可能性について、かねてから課題となっていた。2009年7月、平成21年度文部科学省「大学教育・学生支援推進事業」学生支援推進プログラム(学生支援GP)に、本学の「新潟青陵トリプルサポートプログラム」が採択された。このことを受け、先に述べた背景から、この

事業の一貫として専任臨床心理士が配属された“キャンパスライフサポート室”(以下：サポート室)が、学内に設置された。

本稿では、開設から現在までの取り組みを紹介するとともに、在学生に実施したアンケート調査をもとに、サポート室がより機能的に学生生活をサポートするためには、どのような取り組みが有効であるのか、どのような方向性を目指すべきであるのかについて、若干の考察を加えて報告する。

II. 方法

1: 調査対象と手続き

本学看護福祉心理学部及び、短期大学部の学生567名(男子54名、女子494名、無記入19名)に対し、2010年1月～4月の期間、サポート室に関する質問紙調査を実施した。各学科の講義の中で一斉方式により、調査に同意のあった学生を対象に、無記名方式で実施した。(2010年2月に開催した、学生ホールでの出張相談室において個別に実施したものも含む。)調査実施対象者の内訳は、新潟青陵大学福祉心

理学科100名、看護学科86名、同大学短期大学部幼児教育学科134名、人間総合学科247名であった。なお、集計には回収したすべての回答を採用した。回収率（回収数／総配布数）は、95%であった。

主な調査対象は、これから就職活動を控え相談活動の対象となる可能性の高い大学2年生、短大1年生とした。人間総合学科の1年生に関しては、年度が変わり4月の実施となったため本来は2年生に進級していたが、本研究では集計の都合上1年生と表記することとした。

2：調査内容

設問1では学生の基本属性について選択式で回答を求めた。設問2ではサポート室を認知しているかどうかを「はい」「いいえ」の二件法で求め、「はい」を選択した学生のみ設問3～5の回答を求めた。設問6～8については、サポート室の利用について、設問9、10についてはグループワークについて回答を求めた。質問項目を表1に示した。

表1 キャンパスライフサポート室に関するアンケート

1. あなた自身について教えてください。【学科、学年、性別】
2. キャンパスライフサポート室を知っていますか？ はい・いいえ
（「はい」を選択した人は3へ、「いいえ」を選択した人は6へ進む。）
3. キャンパスライフサポート室の場所を知っていますか？ はい・いいえ
4. キャンパスライフサポート室をどのようにして知りましたか？

・オリエンテーションで聞いて	・N-COMPASS（学内電子掲示板）を見て	・掲示物を見て
・人から聞いて（先生・友人・その他）	・その他（自由記述）	
5. 今までに利用したことがありますか？ はい・いいえ
6. 今後、利用してみたいと思いますか？ はい・いいえ
7. 利用できない・利用しにくいと感じていることはどんなことですか？（複数回答可）

a. サポート室の場所が行きづらいところにあるから。
b. 開室時間に行くことができないから。 →利用しやすい時間帯があれば教えてください。
c. 何をするとところか分からないから
d. 相談するのが恥ずかしいから
e. 一人では行きづらいと感じるから
f. その他（自由記述）
8. 来室するとしたら、どのようなことで利用してみたいと思いますか？（複数回答可）

a. 相談したい																								
<table border="0" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 10px;">・進路</td><td>・資格</td><td>・就職</td><td>・将来</td><td>・家族</td><td>・友達のこと</td> </tr> <tr> <td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 10px;">・経済的な問題</td><td>・実習</td><td>・学習のこと</td><td colspan="3">・クラブ、サークル</td> </tr> <tr> <td style="border-left: 1px solid black; padding-left: 10px;">・アルバイト</td><td colspan="5">・自分の性格</td> </tr> <tr> <td colspan="6">・一人暮らしで心配</td> </tr> </table>	・進路	・資格	・就職	・将来	・家族	・友達のこと	・経済的な問題	・実習	・学習のこと	・クラブ、サークル			・アルバイト	・自分の性格					・一人暮らしで心配					
・進路	・資格	・就職	・将来	・家族	・友達のこと																			
・経済的な問題	・実習	・学習のこと	・クラブ、サークル																					
・アルバイト	・自分の性格																							
・一人暮らしで心配																								
具体的に相談したいことがあれば、どんなことでしょうか。（自由記述）																								
b. 雑談をしたい、休憩をしたい																								
c. 困っていることについてアドバイスが欲しい	d. 心理テストを受けてみたい																							
e. その他（自由記述）	f. 利用してみたいと思わない																							
9. 他学部・他学年の人たちと交流できる時間が、キャンパスライフサポート室にあったら参加してみたいと思いますか？ はい・いいえ
10. 参加してみたいと思う内容のものがあれば挙げて下さい。（自由記述）

Ⅲ. 結果

2件法で「はい」と「いいえ」を選択する場合、その間にある中黒に丸を付ける学生が少数だが存在した。そのため、それらの学生は「中間」と名付け集計した。また、設問3、4、5については、設問2で「はい」を選択した118名のみの回答を採用し集計した。

1. 認知度について

サポート室の名前や存在を知っている学生は全体の2割ほどであり、その中でも場所まで把握している学生は小数であった。これらの結果から、サポート室の認知度は、低いことが示された。(表2、表3)

表2 サポート室を知っているか
n=567 ()内は%

はい	いいえ	無記入
118 (21)	441 (78)	8 (1)

表3 サポート室の場所を知っているか
n=118 ()内は%

はい	いいえ	中間	無記入
32 (27)	82 (69)	1 (1)	3 (3)

また、広報手段としては、学年別・学科別オリエンテーションにおける宣伝活動が有用であった。また、N-COMPASS (学内電子掲示板)、掲示物に関しても、情報提供のツールとして十分ではないが機能していることが窺えた。人から聞いてサポート室を知ったという学生の中には、教員や友人から聞いて知ったという学生が数名見られた。(図1)

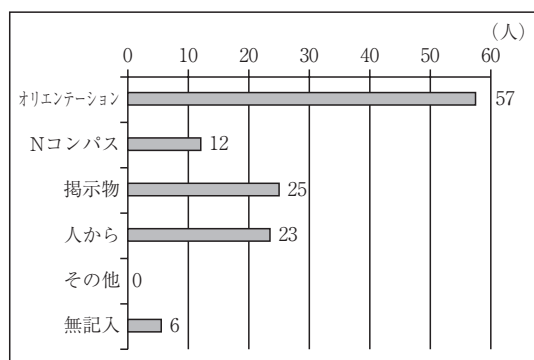


図1 サポート室をどのようにして知ったか

2. 利用について

対象の中に、調査時までにはサポート室を利用したことのある学生はほぼいなかったが、今後利用してみたいと思っている学生は半数を超え、今後のサポート室利用の可能性が示された。一方で、利用したいと思わない学生も半数近く存在した。(表4、表5)

表4 現在までに利用したことがあるか
n=118 ()内は%

はい	いいえ	無記入
3 (2)	112 (95)	3 (3)

表5 今後利用したいと思うか
n=567 ()内は%

はい	いいえ	中間	無記入
287 (51)	251 (44)	9 (2)	20 (3)

学生が利用しにくいと感じる大きな要因に、サポート室の機能や目的について認知されていないことが示された。また、個人の相談に抵抗を示す学生や来室することに恥ずかしさを感じる学生も少なからず存在することが示された。(図2)

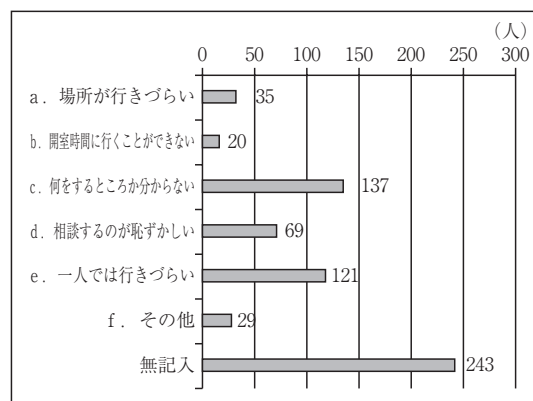


図2 利用できない・しにくいと感じる点
(複数回答可)

また、b.を選択した学生に対し、利用しやすい時間帯について自由記述で回答を求めたところ、9名の回答が得られた。全員が「放課後」と記述し、授業時間後が利用しやすいという意見が聞かれた。f.を選択した学生には、選択肢以外の利用できない・しにくいと感じている点について自由記述で回答を求めた。25名の回答が得られ、「必要だと感じない」「相談することがない」というような内容の記述が少数見られた。

一方で、来室するならば相談をしたいという学生が多く、学生らの中に相談支援に対するニーズが高いことが示された。(図3)

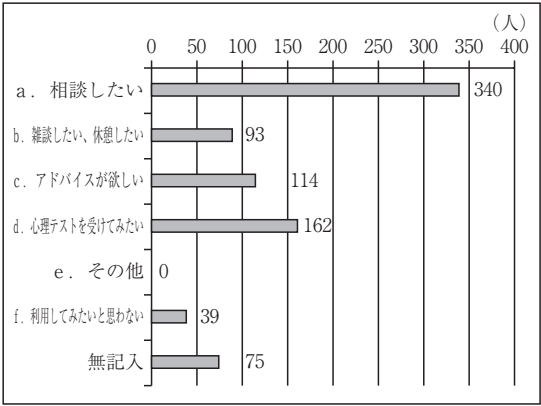


図3 どのような目的で利用したいか
(複数回答可)

また、a.を選択した学生に相談したい内容について選択させたところ、図4のような結果が得られた。対人関係や現在の学生生活のことよりも、進路・就職・将来といった卒業後のことについて相談したいと思っている学生が多く存在することが示された。

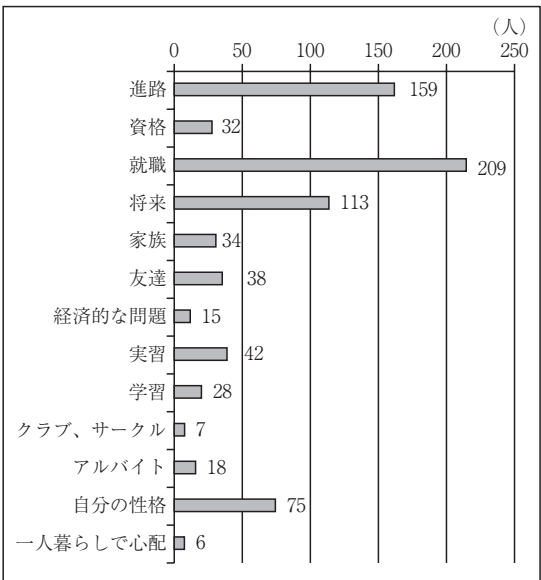


図4 相談したい内容
(複数回答可)

加えて、具体的に相談したい内容がある学生には、自由記述で回答を求めた。結果、5名の学生から回答が得られた。「体調について」と回答した学生が2名いた他、就職活動の進め方や、職業適性、将来や

学習に対する不安等が挙げられており、ここでも就職や将来に関する内容が目立つ結果となった。

3. グループワークについて

交流の場に参加したいと思う学生は多く存在していることが示された(表6)。なお、設問10の自由記述では、「お茶会」、「ケーキ作り」、「お菓子作り」などが目立った。

表6 交流の場に参加したいかどうか
n=567 ()内は%

はい	いいえ	中間	無記入
237 (42)	281 (50)	7 (1)	42 (7)

Ⅳ. 本学におけるキャンパスライフサポート室と現在の取り組み

1. 学生支援体制について

本学における学生支援体制の全体像を、図5に示した。各部署が連携を図りながら、学生の生活や就職・学修に関わることで広くサポートしている。併せて、トリプルサポートプログラムの概念図についても図6に示した。専門の相談員が就職活動及びキャリア形成を支援するキャリアサポート、様々な講座等を開催するスキルアップサポート、そしてキャンパスライフサポートの三本柱で学生の就職活動を支援している。就職活動をしている(又は、控えている)学生のメンタル面のサポートをしていくことも、サポート室の大きな役割のひとつとなっている。

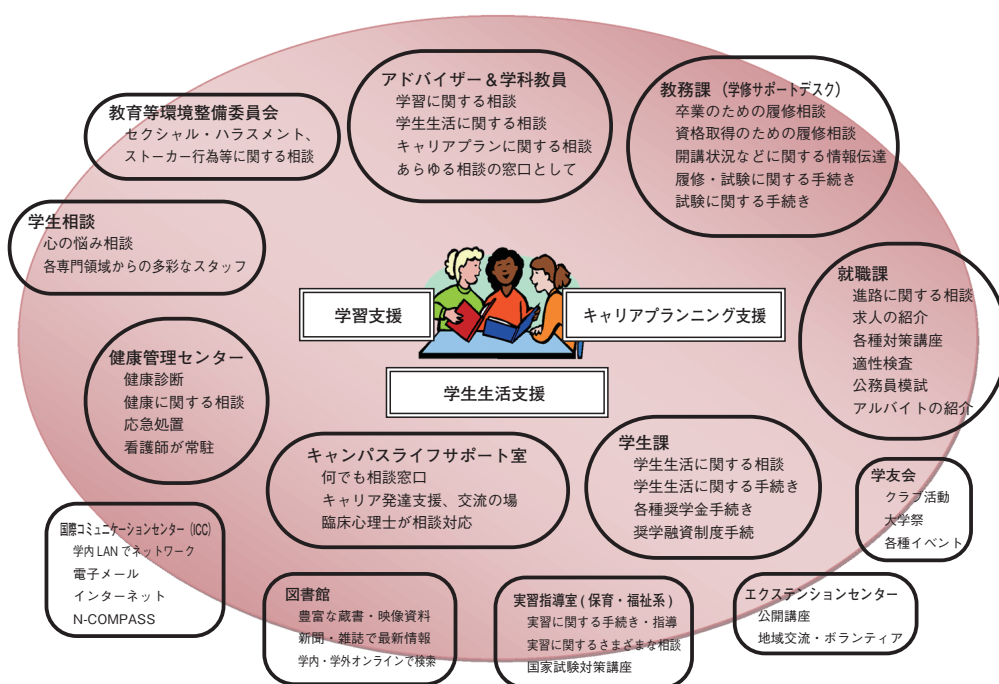


図5 学内学生支援体制の全体像

新潟青陵トリプルサポートプログラム

平成21年度「大学教育・学生支援推進事業」
学生支援推進プログラム（学生支援 GP）



図6 新潟青陵トリプルサポートプログラムの概念図

2. キャンパスライフサポート室の支援体制と利用状況

サポート室は、平成21年10月に開設された。平成22年4月までは非常勤臨床心理士2名をカウンセラーとして、週に4日、1日5時間の開室で運営してきた。同年5月以降は、新たにカウンセラーを1名加え、週5日の開室で運営をしている。これまで、個人またはグループでの自主来談を主として受け付けてきた。利用の仕方としては、開室時間内であればいつ来室しても良いこととなっている。予約などは必要なく、空いていれば相談することができる。1回の相談時間は30

分前後としており、次回の予約などは原則として受けていない。利用者の中には、友人同士で来室する学生も時折見られるが、多くが個人の相談として来室している。また、授業歴の節目となる2月と8月、連休明けの5月にそれぞれ3～5日間、学生ホールで相談を受け付ける“出張サポート室”を開催した。

サポート室開設から今年度6月までの利用状況を以下に示す。利用者数・件数と内訳は、表7、表8の通りである。なお、春休み期間にあたる3月は閉室とした。

表7 利用状況①

相談内容	人間関係	自己	進路	学業	体調	その他	総件数
延べ件数	4件	18件	0件	5件	2件	9件	38件

平成21年10月5日～平成22年2月26日（開室日数71日） 利用者数19名

表8 利用状況②

相談内容	人間関係	自己	進路	学業	体調	その他	総件数
延べ件数	2件	13件	1件	2件	0件	8件	26件

平成22年4月5日～平成22年6月30日（開室日数54日） 利用者数21名

V. 考察

1. 身近な相談機関として

アンケート実施時のサポート室の認知度は低かったものの、何かしらの相談をしたいという学生が、潜在的に存在していることが分かり、相談できる機関が学内に求められていることが示された。これらのアンケート結果を踏まえ、新学期のオリエンテーション時にサポート室のリーフレットを作成し全学生に配布した。その他にも、掲示物を通して案内をしているが、今後もうこういった利用の仕方ができるか等の具体的な内容もアナウンスをしていく必要があると言える。また、相談することに対して抵抗感を持つ学生が多くいることと相談へのニーズの高さを併せて考えると、学生が気軽に相談することのできる機能が求められていることが推察できる。

来室への抵抗を軽減するためのサポート室の在り方のひとつに、「何でも相談」の機能を持つことが必要と考えられる。2000年に文部省高等教育局から出された報告書「大学における学生生活の充実方策について―学生の立場に立った大学づくりを目指して―」（通称：廣中レポート）においても、「何でも相談窓口」の設置が必要であると謳われている。廣中レポートによれば、「学生がある悩みについて相談しようとしても、どこに相談すればいいのかわからない」ことがあり、そのようなことに対処するため、「基本的な相談に応じつつ、相談内容に応じて適切な学内外の相談機関や教職員を紹介することが有効であると考えられる」と述べられている。本学には、アドバイザー制度がある他、学生相談を担当する教員がいる。サポート室は、そういった学内支援体制におけるコーディネーターとしての機能を持つ

ている。学生に対しては門戸を広く持ち、様々な相談を受け入れる。そして、必要があれば適当な他部署や学内機関、教職員へ学生を繋ぎ、連携していく役割を持つべきと考える。さらに、どんな相談でも受け入れ他部署と連携をしていくためには、相談に訪れた学生への的確な見立てが必要となってくる。病態水準の把握を含め、こういった問題が背景にあるのかということを臨床心理学的な見立てを持ちながら学生に関わっていくことが必要である。

2. キャリア発達支援の機能

高石（2009）は、高等教育での学生支援とは、単に人格形成の援助、成長の支援というだけでなく、社会へ送り出すこと、すなわち「学ぶ者から働く者へ」「与えられる者から与える者へ」の移行を助けるという使命を担っていると述べている。

アンケート結果からも、学生の相談したい内容は進路や就職に関する項目が多数を占め、将来に対する不安を抱えている学生が多く存在していることが明らかとなった。トリプルサポートとの連携はもちろんのこと、就職課との連携や職業適性や興味に関する検査の実施など、キャリアサポートに力を注ぐ必要があると考えられる。しかしながら、サポート室での進路に関する相談は1件に留まっている。心理テストや自分の性格に対する関心が高い学生も多くいることを考えると、気楽に取り組むことのできる心理テストや職業テストを用いながら学生をサポートしていくことが可能ではないかと推察できる。

また、将来への不安に伴い以前から抱えていた個人の問題が表面化してくることも考えられる。職業テストや心理テストを体験することで自分自身の問題に向き合う学生も出てくることが考えられ、心理

面接を行っていくなどの内的な支援が必要となってくるであろう。このように、どのようにして今後の自分の進路を決定していくか、そのためにどういった資源が使えるのかという現実的な支援と、相談や心理テストなどを用いた内的な支援の両方が必要であると推察される。就職活動をサポートしていくことは、その学生個人をサポートしていくことにも繋がるものと考えていきたい。

3. グループワークによる支援

アンケートの結果から、個人的に来室し相談したいというニーズに加えて、複数で来室したい、他学部や他学科の学生と交流したいという学生も存在することが分かり、グループワークによる支援の有効性も示された。グループワークについて早坂（2010）は、その目的を他学生との交流体験と、他者との交流を通して得られる自己理解として挙げている。青年期のアイデンティティの確立には、他者との交流や自分自身の性格や感情への気づきを得ることが不可欠である。

アンケート結果からは、「一人では行きづらい」「相談するのが恥ずかしい」という意見も聞かれたため、サポート室では普段から学生の利用のない時には扉を開けたままにしているが、自由に出入りをしていく学生はほとんどいない。学生が気軽に自由に利用できるようにするためには、改めてサポート室を開放し学生が気軽に出入りできる場所と時間を設定することが必要であることが考えられる。また、希望する学生に対して心理テストを実施している相談機関は多いが、心理テストは学生が関心を持ちやすく敷居が低いと、潜在的に援助ニーズがある学生をテストの受検をきっかけに相談に繋げていくことができる。各種心理テストや学生が利用しやすいグループワークを開催することで、サポートを必要としている学生の相談への導入となり、学生同士の交流促進と自己理解へのサポートが可能ではないかと考える。

前述したように、当サポート室では、学生の就職活動のサポートとしての役割も持っている。“就活力”の向上を目的として、「自分発見」や「ストレスマネジメント」等のテーマを設定し、グループワークを通して心理教育を行っていくことも求められている。カウンセラーは、グループ内でファシリテーターの役割を取り、学生同士が自ら自己理解を深め合ったり、自分の力でストレスに対処できるスキル

を身に付けたりできるようサポートしていく。また、なかなか内定を得られないために就職活動に行き詰まる学生も見受けられるようになっている。そういった学生たちを集め、ディスカッションをしたり、互いに励まし合う場を設けたりすることで学生の就職活動へのモチベーションを保つことも出来るのではないかと考えられる。なお、グループワークを通じて、個別の対応が必要と思われる学生については個別の心理面接を行いながらフォローをしていきたいと考えている。

グループワークについては、学生のニーズを確認しながら今後の検討課題として取り組んでいきたい。

4. 「青陵キャンパスライフサポート—包括的臨床心理学的モデル」の模索

高石（2009）は、高等教育全体の課題として、わが国の「大衆型大学」における学生像を解体し、新たな学生像モデルの構築を提案している。また、斎藤（2004）も、従来の学生相談は、特に国公立大学の「医療モデル」組織内で、位置づけられた「保健管理センター」が代表的なモデル像であったことを指摘しており、そのために支援の内容や対象が、「医療モデル」の枠組みに限定されてきた可能性がある。今後、本学のような中規模私立大学における「学生支援のモデル構造」としては、従来型「医療モデル」を越えて、「非言語的次元の関係性への働きかけ」までも含む「包括的な臨床心理学的視点」の基本理念に立ったモデルを模索したい。すなわち具体的には、個別的な問題を抱えた学生に対するいわゆる「従来型の学生相談モデル」の枠組みを越えるものとして、イギリスの中規模大学であるエセックス大学の学内支援構造を参考にして、大学全体の学生や教職員と力動的に共生および協働するキーステーションとして位置する本学独自の「プラットフォーム型」相談モデルの中で模索し続けていく方向である。

VI. おわりに

本論では、学生を対象にしたアンケート調査を元にキャンパスライフサポートに求められる役割を臨床心理士の立場から考察した。①何でも相談窓口、②キャリア発達支援、③グループワークによる支援の3つの機能が有効であることが分かった。さらに今後は、より機能的かつ柔軟な学生支援が可能となるよう、「プラットフォーム型」相談モデル構造を想

定し、具体的な学内連携について一層の検討を重ねていく方針である。本論は、初期の立ち上げと取り組みの方向について第1報として報告した。今後の活動や成果については第2報として報告していく予定である。

Ⅶ. 文献

- 早坂浩志（2010）：第10章 学生に向けた活動2
—授業以外の取り組み—、日本学生相談学会50
周年記念誌編集委員会〔編〕『学生相談ハンドブック』 学苑社、185～201
- 文部省高等教育局（2000）：大学における学生生活の
充実方策について—学生の立場に立った大学づくり
を目指して—（報告）
- 日本学生支援機構（2007）：大学における学生相談体
制の充実方策について—「総合的な学生支援」と
「専門的な学生相談」の「連携・協働」—
- 斎藤憲司（2004）「学生相談の新しいモデル構造にむ
けて～多様性（教職員）と専門性（カウンセラー）
の協働」『大学と学生』第2号、6-12.
- 高石恭子（2009）：現代学生のこころの育ちと高等教
育に求められるこれからの学生支援、『京都大学高
等教育研究』第15号、79-88.